

平成 27 年度第 2 回石川県総合教育会議

日 時 平成 28 年 3 月 29 日（火）15:30～16:40

場 所 石川県庁行政庁舎 1106 会議室

## 1 開会

（司会）

ただ今から、平成 27 年度第 2 回石川県総合教育会議を開会いたします。初めに、谷本知事から挨拶がございます。

## 2 知事挨拶

（谷本知事）

第 2 回の総合教育会議でございます。皆さま方には日頃から本県の教育行政に多大なご尽力を頂いており、お礼を申し上げたいと思います。

この総合教育会議は、今更申し上げるまでもありませんが、他県におけるいじめ問題などをきっかけにして地方教育行政が改正され、知事と教育委員会が相互の連携を図りながら教育行政を推進するために設置したという経過があります。おかげさまで、石川県では法改正のきっかけとなっているような問題は生じておりません。これまでも知事部局と教育委員会が円滑に連携・協力して取り組んできたところでもございます。全国学力・体力テストでも常に上位をキープしていますし、具体の成果も現れているほか、教員の資質向上に取り組んできた「いしかわ師範塾」については、各県からの視察が相次いでいるという話も聞いておりますし、国からも全国のモデルになると高い評価を頂いているところでもございます。

この 4 月からいよいよ、石川におきましても新たな教育委員会制度に本格的に移行することになりますが、引き続き、知事部局と教育委員会が責任ある役割分担の下、連携・協力し、本県の教育行政を推進していきたいと考えております。

申し上げるまでもなく、教育は未来への先行投資であります。本県の飛躍・発展のためには、次の時代をたくましく切り拓いていく優秀な人材を育ていかなければなりません。人口減少時代にあって、地方創生の動きが本格化するなど、本県を取り巻く環境が大きく変化する中、このたび、石川の未来を担う人づくりに向け、今後 5 年間の本県教育の総合的な指針となる新たな教育振興基本計画が策定されたところです。

本日は、これを、改正地方教育行政法で策定が求められている「教育に関する大綱」として位置付けることについて協議いただきたいと思いますが、せっかくの機会でございますので、大所高所から忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

（司会）

それでは議事の方に移らせていただきます。なお、本日は中村教育委員がご欠席の連絡を頂いております。

ここからは、総合教育会議の事務局長であります黒野総務部長が進行させていただきます。

### 3 議事

#### 「第2期石川の教育振興基本計画」について

(黒野総務部長)

総務部長の黒野でございます。どうぞよろしくお願いたします。

お手元の資料1をご覧ください。昨年6月3日に開催しました第1回の総合教育会議において説明させていただいたものです。地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部改正により、新たに教育の目標や施策の方向となる教育に関する大綱を知事が策定するとされたところですが、この資料の上の右のところですが、国は、知事が総合教育会議において教育委員会と協議・調整の上、「教育振興基本計画」をもって「大綱」に代えると判断した場合には、別途、大綱を策定する必要はない、としています。本県では、今年度、石川の教育振興基本計画の改定が行われる時期でありましたことから、改定後の教育振興基本計画を大綱として位置付けることとしまして、こうした共通認識の下で教育委員会において教育振興基本計画の改定作業を進めていくということで、前回の第1回会議でご了承いただいたところでございます。今般、第2期石川の教育振興基本計画としまして計画がまとまりましたことから、新たに大綱として位置付けることとなります。こちらの内容につきまして、ご説明をさせていただきたいと思っております。

それでは、事務局の平島教育次長兼教育振興推進室長よりご説明をさせていただきます。

(平島教育次長)

それでは、改定のポイントを資料に沿ってご説明いたします。資料2-1をご覧ください。

まず、左側の方から、基本目標1におきましては、「地方創生」の動きを踏まえまして、「いしかわに誇りと愛着を持ち、世界と地域に貢献できる人材づくり」を基本目標として掲げ、「地域の活性化に貢献できる人材の育成」「イノベーションを担う人材の育成」「地元企業や大学と連携した人材の育成」などを新たな施策の方針といたしました。

基本目標2におきましては、確かな学力の育成を図るための取組といたしまして「県立高校『学力スタンダード』による学力の質の確保」や、いわゆる「アクティブ・ラーニングの推進」を明記したことに加え、「ICTの活用等による新たな学びの推進」を施策の方針といたしました。また、実社会に必要な能力として、選挙権年齢引き下げに伴う高校生に対する「主権者教育」の取組を明記しました。

基本目標3におきましては、道徳の教科化を踏まえまして「道徳教育の充実」を図るほか、いじめ・不登校等に対して、これまで以上にしっかりと取り組んでまいることとしております。

基本目標4におきましては、教員の急激な世代交代を踏まえまして、「いしかわ師範塾による研修」を教員の資質・能力の向上の取組とするとともに「優秀な教員志望者の確保と養成」を施策の方針として掲げております。

基本目標5におきましては、大学コンソーシアム石川等、高等教育機関による「グロー

バル人材の育成」を新たな取組として明記いたしました。

基本目標 6 におきましては、家庭の教育力の向上として、子どもの忍耐力、協調性、自制心など、学習面における、いわゆる「非認知能力の育成」を新たな取組として明記いたしました。

基本目標 7 におきましては、生涯学習活動を支える環境づくりの中に、「県立図書館の移転・建替えによる機能の強化」を明記することとしました。

基本目標 8 におきましては、東京オリンピック等の開催に向けた事前合宿誘致や若手アスリートの育成など、「東京オリンピック・パラリンピックを見据えた取組の充実」を施策の方針として掲げることいたしました。

改定のポイントは以上です。

なお、資料 2-2 は基本計画の概要をまとめたもので、お手元の「第 2 期石川の教育振興基本計画」の冊子と合わせて、後ほどご覧いただければ幸いです。以上です。

#### 4 意見交換

(黒野総務部長)

それでは、続きまして意見交換に入りたいと思います。どなたからでも結構ですが、まずは教育委員長の金田様、いかがでしょうか。

(金田教育委員長)

大変素晴らしい振興基本計画ができたと思っております。ただ、ここで立派なものが出てきても、これを実行・実践してくれるのは最前線に立つ学校です。非常に懸念しているのは、最前線の学校、あるいは先生方が冷え切ってしまっていると、いくらこういう立派なものを作っても、なかなか成果が出てこない。基本計画が大きく花開けるかどうかは、教育委員会あるいはそれに携わる人たちが現場との間を風通しの良いものにできるかどうか。あるいは、先生方に私たちがやらねばという思いにさせられるかどうかにかかっていると思っております。現場が冷え切らないようにやらねばならない教育委員会の使命は、大きいと思っております。

(谷本知事)

これは 2 期だけれど、第 1 期の教育振興基本計画は円滑に機能したのですか。

(平島教育次長)

はい、非常に円滑に機能しました。

(谷本知事)

第 1 期の教育振興基本計画は大体計画どおりに達成したのですか。

(平島教育次長)

はい。ふるさと教育や学力向上について非常にきめ細かい計画を立てて実践してきまし

た。それに加えて、第2期で、さらに新しい指導計画に基づきまして、それを先取りする形で実践していくということです。

(谷本知事)

知事部局というか、知事の方は教育の具体的な項目についてまでいろいろと申し上げませんが、学力向上、体力向上についても、将来何か不安のようなものがあるとすれば、早い段階で摘み取って、今の学力なり体力が高いレベルを維持できるような状況をつくり出していってもらわないと。私たちは細かいことまで分からないから。よろしいのではないですか。

(橋正教育委員)

学校現場に立つ者としての立場から、基本目標3に関わりまして先生方にお願ひがあります。小さいことかもしれませんが、教員は一人一人の子どもの顔をしっかりと見てほしい。基本目標3の心の教育、道徳、人権、いじめ・不登校は、先生に求められる基本かなと思っております。現在、知事のおかげで師範塾も充実して、あるいは教員研修制度もとても充実して、教員の指導力も全国のトップレベルにあると思っております。それは学力調査に明確に表れているかと思っております。ただ、去年、思ってもいない悲しい出来事といひますか、驚かされまして、眠れない夜をしばらく過ごしました。

(谷本知事)

何でしたか。

(橋正教育委員)

高校生の殺傷事件など。

(谷本知事)

中能登の。

(橋正教育委員)

原因はともあれ、ああいうことがあると、学校に立つ者としては本当に眠れないというか胸がドキドキして、自分の胸を落ち着かせるのにしばらく時間がかかりました。人間の優れたところは、知を磨き、想像力を働かせて、新たな価値あるものをつくり出す、あるいは生み出す能力だと思うのですが、これらを磨き上げるべき学校なのに、全く別のことで子どもたちが小さな胸を痛めているとすれば、それを取り除いてやるのが現場の務めだろうと思っております。そういうことから、今申しましたように、知事のおかげで教科の指導力は非常に高いものがあると思ひますが、石川の教員のレベルをもう一つ上の完璧なところへ上げるためには、しっかりと一人一人の子どもの顔を見てほしいと思ひましたので、先生方にはそういうお願ひができればいいなと思ひています。

(谷本知事)

そういう意見ですが、何かコメントございますか。

(平島教育次長)

そのあたりのことにつきましては、第2期の計画の中にも非常にきめ細かい形で盛り込んでいると思っておりますので、十分に。

(谷本知事)

昔は50人学級など1学級の生徒の数が多かったけれど、それに比べて今は1学級30人台なのでしょう？ だから、昔に比べれば目が行き届く環境になっているような感じがするのだけれど、より向き合う姿勢の質が問われるようになってきているのかな。昔は大規模学級が当たり前だったから、一人一人に目を届かせなくても生徒がたくましかった。でも、やはりあったのでしょうね。あったのだけれど、それが顕在化しなかったということだね。今は少人数になってきたから、そういう事柄が非常に目立つようになってきたということかな。大事なことですね。はい、どうぞ。

(眞鍋教育委員)

お二人は教員のことを述べられました。私はまた違う視点からなのですが、教育振興基本計画の7ページに、教育をめぐる現状と課題で、学力観の転換という話題が出てきています。学力と体力をいかに高くするかということが目標とされてきたわけですが、育てる人材像が今、大きく転換している時期にあるのではないかと考えています。それは大学でもICT、アクティブ・ラーニングという教育方法が求められたりしていますが、そういうものが小中高、大学にも取り入れられて、その方法も変わってきていますが、まず本当に地域の問題や社会の課題について、自分事として考えられるような子どもたちをどう育てるか。それで自分で動ける人材をいかに育てるかということが、今回の基本目標1でいろいろ出ている人材の育成ということだと思います。

今、大学で教員をしまして、そういう動ける学生を育てていると思っておりますが、石川県内の高校生にそういう動きが少ないのではないかと懸念しています。これは長期構想のときにも申し上げたのですが、能登の高校生が能登にとどまらないということをやったりしていますし、金沢大学へ推薦を受けにきた他府県の学生などは、高校時代から非常にアクティブにいろいろな活動に参加しています。私が知らないだけかもしれませんが、石川県内の高校生でそんなに活動していたという子は、あまり見たことがないのです。今、地域に学生を定着させて、県内就職率を10%上げようという地域創生の動きもありますが、大学に入ってからそれを教えても遅いのではないかと気が非常にしております。小中高とつながって、そこから何とかできないものだろうかと思っております。それは現場の教員の方にこれ以上負担を押し付けて、ふるさと教育をお願いしますとか、地域課題を解決するために地域に入りましょうというのはなかなか難しいと思っておりますので、ぜひ大学と外部の資源を活用して、大学生と高校生が一緒にとか、そういう枠組みがつかれないかなと思っていて、個人的に動きたいと思っております。

(谷本知事)

いかがですか。

(平島次長)

高大連携ということは、今まで言葉的にはあったのですが、それ以上に実質的に、そういう取組を第2期の中では盛り込ませていただいております。ふるさと教育にしましても、言葉的なふるさと教育以上に踏み込みまして、質の高いものに取り組ませていただいております。

(谷本知事)

10年前に世界史の未履修問題があったけれど、あれを見ていると、小中高の教育は大事なわけだけれど、高校と大学が切れているのです。要するに、入試改革というのは、大学の入試改革もセットでないといけないのに、高校の入試改革までは行われたけれど、大学はみんな自分勝手にやっているわけです。高校は、大学に進学する生徒が非常に多くなってきたから、傾向と対策はどうしてもやっていかなければいけない。ところが大学の方では、世界史を受験科目にしている大学はないらしいです。だから、高校では世界史を学ぶ暇があったら日本史を勉強しろとなっている。これは要するに、高校の3年間で大学受験できるような知識を学ばなければいけない。ところが、小中学校がそこまでやっていないから、結局、高校で全部そのしわ寄せを受けてやらなければいけないので、校長さん方はやむを得ず世界史は外して、そこで大学の入試に出るような科目をやったので、それが世界史未履修として大変な問題になりましたが、私はあれは大学の入試改革を手つかずでほったらかしにした、文部科学省の問題だと思います。本当は大学の入試改革まで一貫してやらないと、高校にみんなしわ寄せがいく。あれは本当に教育プロパーの問題で、私は対岸の火事みたいに見ていましたから、余計客観的、冷静に見れたわけです。大学の入試改革を全くやらずして、高校はゆとりを持ってと言われても、高校の生徒諸君が全部大学へ進学するという状況の中では、やはり入試科目を重視しないと、大学の入試に受からないのです。3年間で大学の入試に合格するような体制をつくっていかなければいけないとなると、大学が世界史まで入試に出せばいいけれど、出さないとなると、入試問題に出ないような科目を一生懸命教えても意味がないというか、それよりは、大学の入試問題に出るような科目に重点を置いていかに得ざるを得ないわけで、本当は大学も含めて一貫した体制をつくらなければいけないと思います。だから、特に高校はなかなか大変だと思います。3年間で大学の入試に合格させなければいけないという、ものすごく大きいプレッシャーを抱えておられますから、なかなか難しい問題であるけれど、問題意識は持ちながらやっていかなければいけないと思います。

金沢大学は、世界史は入試科目に入っているのですか。

(金田教育委員長)

独自で作る世界史の問題を二次で課すことはないでしょうか？

(八重澤参与)

ないですね。

(金田教育委員長)

センター試験の試験点数だけで世界史を見ているだけです。

(谷本知事)

それで世界史は高校では必須になっているわけです。

(眞鍋教育委員)

でも、今、大学入試改革を文部科学省の方で進めておりました。

(谷本知事)

それは入試科目を統一するの？

(眞鍋教育委員)

記述式などを取り入れようとしていますので。

(谷本知事)

それはいつから適用になるの？ いつから変わるの？

(金田教育委員長)

時期は明示できませんでしたね。

(眞鍋教育委員)

はい。

(谷本知事)

それだとやらないのと同じじゃない。

(眞鍋教育委員)

採点に時間がかかる。

(谷本知事)

時期を明示しないで入試改革の検討がされているというのは、やらないのと同じことではないですか。やるなら時期を決めてやらないといけない。時期は未定で・・・。

(松澤参与)

僕は学部入試には関係していませんが、中教審は高大接続や入試改革をしようとしています。どこの学生から適用するかという話になると非常に難しい問題で、高校側の反対が結構強いのです。そこと大学と高校の接点をどうしようかという話で、入試科目もあるでしょうし、採点方式にも問題がある。今一番の問題は、センター試験で1点の差で合否

が決まるというのが非常に大きな問題で、そんな1点の差があるのですかという見方もあるわけです。

(谷本知事)

1点差ぐらいなら、すくってあげればいい。生徒の獲得にみんな一生懸命になっているわけでしょう。

(松澤参与)

学部入試はそれに適応している部分があるので。

(谷本知事)

そうでしょう。

(松澤参与)

根本的な問題は、一つの単一尺度だけで、筆記試験だけでやっているとか、あるいは大学がAO入試を入れたり、面接を入れたり、いわゆる学生のトータルの力を見るという入試に変わらないと、なかなか1点から抜けられないというので、そういう議論は今後なされていく。ただ、公平性ということを言うと、すぐ点数だけという話になってしまうので。

(谷本知事)

面接で合否を決めるというのは。会社の採用なら面接で、この人は会社にとって有用な人間であるかどうかという尺度がはっきりしているから面接でも選びやすいけれど、大学の入試で面接で、この人はうちの大学に入ってくるにふさわしい生徒だとかそうでないかというのはなかなか。

(松澤参与)

特にアメリカあたりは、非常に優秀な学生を集めるためにも、入試担当の先生がいらっしゃって、それで面接したり、いろいろな情報を集めてトータルで、ある意味では試験ではなく合否を判定するような形をとっているところもあると思うので、日本も多少そういう方向に。

(谷本知事)

大学の名前は言えないけれど、石川県には入学は比較的緩やかで、全員を就職させるために大学に入ってから鍛えるという大学がある。

(松澤参与)

うちは典型的。

(谷本知事)

それに耐えきれなくて中途退学する学生もいるらしいですけど。だけど、全員就職さ



せるためには、企業のニーズに応えるような人材養成をする。そのためには入学は比較的緩やかに受け入れて、入ってからどんどん鍛える。その鍛え方に耐えられない学生は退学していく。だから難しいですよ。入学のときに人品骨柄まで全部審査し尽くすなどということは、恐らくできないでしょうね。アメリカはそうやっているのでしょうか？ 入学は緩やかで、入ってからびしびし鍛える。それに耐えられなくてリタイアする学生がいると思いますよ。新聞には出ないけれども、恐らく。

(松澤参与)

今は日本の風土として入試が最終ターゲットなのですが、卒業することを最終ターゲットにする、まずはそこなのですよ。だから入学式がお祝いですという話になってしまうのだけれど、それはある意味で厳しさのスタート地点なのですよ。そこで最終的にはきちんと卒業するというので、今一番大きな問題は、入試はイコール、卒業を保証するという制度なのです。そのために選んでいるので、入ってしまったら悠々自適な学生生活を謳歌するという形になるので、そこら辺がどんどん変わっていかないと。そういう意味では、いろいろな意味で大学の質の保証など、いろいろな観点で変えようとしてはいると思っています。

(丸山参与)

今知事がおっしゃるのは、京大でも問題になりましたが、3倍ぐらいの学生を入れて3分の1卒業させようと思うと、教官定員からスペースから全部増やさないと駄目なのです。だから結局はなかなかできない。やろうと思えば技術的にはできるのですが。

(谷本知事)

そうか。丸山先生がおっしゃるなら、その前提として大学をもっと淘汰しなければいけない。丸山先生がおっしゃっているように、大学の数を減らせば、緩やかに入れて。

(丸山参与)

それもあります、先生の数を増やさなければいけないし、スペースも増やさなければいけない。3倍の学生を入れて教育しようと思ったら、3倍の先生が要るわけです。1年生については3倍の教員を配置して、出るときには3分の1でいいということにもつながる。

(谷本知事)

そうならば、大学だけの勉強ではなく自宅での学習など、学生は相当鍛えられないといけないと思います。大学だけで勉強するのではなく、自宅でも勉強するように宿題を与えてやるという形でないと、大学の先生をたくさん雇わなければいけない。学生時代は遊ぶ暇もない。昼間は大学へ行って勉強して、そこで課題を提供してもらって自宅へ帰ってまたそこでも勉強。

(丸山参与)

アメリカは大体そうですね。1時間の講義で3時間勉強してこいということで、本当に

実際にやっていました。それくらいやるのだったら別ですが、今の大学は朝から晩まで講義ですから、全然駄目です。

(谷本知事)

話がどこへ行ったやら (笑)。大学にも課題、問題があるということ。どうぞ。

(横山教育委員)

今日は中村委員がお休みなので、この中で唯一、民間の仕事をしている立場として少しお話ししたいと思います。今の経営、ビジネス自体も、少し前までは、少しクールな素敵なものをきらきらと輝かせながら、カッコいいコピーライティング、文章などで飾りながら何かを見せるということを行ってきたのが、最近ではリアルな分かりやすい言葉で、その熱い思いが伝わるような、例えば企業理念の表現が求められてきています。そういったことから、基本計画の中にも素晴らしい言葉がうたってありますが、その中で一つ、リアルな、人の温度が伝わる表現という中で、「ケアする経営」といった言葉がすごくうたわれてきております。ケアというのは、何もけがを手当することではなく、情熱を持って共感する経営という形で、うちは中村委員とは違って、とても少ない従業員ではありますが、そういった形で。

本当に少し前まではプライベートに干渉しないというムードが高かったのですが、最近ではさまざまな相談に乗ろうという視点が大事だと、共感しようとする気持ち。何か言われたら、「はい、はい」ではなく、そこに一步踏み込んだ姿勢が問われてきています。そうすることで、仕事のベクトル自体が、例えば上司に認められたいからとか、自分の得になるからということではなくて、プロジェクト自体が見られるということにつながっていくのではないかと考えています。

その中で、従業員に対して、気付いて、共感しようという気持ちで臨んで、そこから発展性を求めるということを見ると、大人の世界も子どもの世界も全く同じなのではないかと考えます。「〇〇させよう」「〇〇せねばならない」といういろいろな計画があって、国もいろいろな旗を掲げていて、ICT などいろいろな言葉がさまざまに右往左往していますが、その中で、何が、どこにベクトルが行くべきなのかという部分に重点を置く。子どもたちの悩んでいる気持ち。例えばコップに水がたまっているところに、いろいろな意味で継ぎ足そうとしても何も入らないのと同じで、子どもの心、気持ちに寄り添い、共感しようとする。今、教育委員会でも、ありのままを受け入れようということがあって、そういったことを行った上での教育がとても大事だと思います。

先ほど、ICT という言葉が浮上してきているという話をしましたが、現場を見にいって、例えば先生方は難しい道具を使われていたのですが、それがちょっとフリーズしたり、逆に生徒が「これは説明した方が早いよ」と言って黒板に出て書いたりするなど、現場を拝見していると、いろいろなものに惑わされず、ベクトルをきちっと向けた状態にすること。そして、知事が言われたような教員の資質向上、人づくり、人こそ宝であるというのは、石川県の師範塾の思いにつながっていくのではないかと考えています。すみません、意見になりましたが、今後もそういうことで、皆さんで力を合わせてベクトルを間違えないようにいければいいなと考えております。

(谷本知事)

10年ぐらい前でしたか、アメリカの教育現場を視察しようというのでサンフランシスコとロサンゼルスへ行ったのですが、向こうは小中学校一貫して1年生から12学年までになっていました。そして、いろいろな話を聞くと、教育の基本計画というのは時代とともに変わるといえるか、非行問題などが出てきたときには、学力向上にいき過ぎているから心の教育をしなければいけないとか、学力が付いて行けない皆さん方が、付いていけないから、非行に走ったりして学校が荒れるということがあるので、学力一辺倒では駄目で、心の教育をしなければいけないというので、心の教育にぐっと重点を置いてやって何年かすると今度は学力が落ちてくるわけです。学力が落ちてくると、今度は世界的に見てアメリカの学力はこんなに低下しているというので、今度は保護者が非常に問題視する。今度は学力向上対策に切り替えなければいけないとなると、また落ちこぼれが出てくる。それを繰り返しながら、行きつ戻りつしながらやっている。だから、確固たる、不拔の体系みたいなものがない。その時々で、心の教育へシフトしていったり、また学力向上にシフトしていったりというのを、アメリカは10年単位ぐらいで繰り返していると言っていました。

学力向上の方向へ行くと、どうしても落ちこぼれが出てくるとか、非行に走るとか。そうすると心の教育を怠って学力一辺倒でやるからだと批判が出てくるから心の教育をする。そうすると今度は学力がどうしてもおろそかになっていく。その行きつ戻りつで、接点を探していくと、アメリカの人たちは言っていました。それから、保護者が非常に関心を持っている。小中学校視察へ行くと、ウィークデーなのに必ずPTAと一緒に来ておられる。「申し訳ないですな」と言うので、「いやいや、当然の務めだ。われわれも学校教育に参画している。責任の一端を負っている。だから学校教育については意見を言う代わりに協力もする」と。だから、そういう視察がある場合には、勤め先をお休みして、教師と一緒に説明してくれました。それが日本のPTAとだいぶ違うところです。

(八重澤参与)

タックスペイヤーという話ですか。

(谷本知事)

教師に対してもものを言う代わりに責任も一緒に共有する。ただ遠くにいて教員だけを批判するのではなく、自分たちも責任の一端を負って学校教育の運営に参画する。だから、僕たちが視察に行くと、必ずPTAの方がお休みを取って来て、一緒に説明してくれる。だから、当事者意識は学校の教員と同じです。だから学力が低下すると保護者から反動が出てくる。

(樫見参与)

今回の教育振興基本計画、もともと教育の基本は人材養成です。ただ、人材養成の中で、恐らく2期の方は、時代の趨勢といいますか、グローバル人材の養成、それから異文化との交流を図るツールとして英語教育の充実に非常に力を入れられたということが今回の大きな特徴です。

それから方向としては、ICT や、昔風の机と教壇を固定して、要するに教員が一方的に話すのではなくて、先ほどお話がありましたように、教員も動くし、子どもたちもいろいろな形で場所を変えて学びの場、学びの空間を創造するといったような新しい取組を盛り込んでいるということが今回の非常に大きな点だったかと思います。

先ほどセンター入試の話がありました、大学は最終高等教育機関なので、卒業の段階である程度一つの人材となったものを出していくのですが、そのときに、今現在、大学では推薦入試、AO 入試、一般的な入試を行っているのですが、やはり、センター試験での国語、数学、英語、社会といった基礎学力というのは、非常に必要なことです。確かに点数で差が出て、1 点差でどうのというのは非常にかわいそうではあるのですが、何を学ぶにしても、基礎学力は必要です。これがきちんと身に付いていない子は、大学でさらにいろいろな専門的な教育をするときに次に進めない。すぐに役に立つ知識や、面接などは、一見して良さそうなのですが、長い目で見ると、小中高と地道に積み上げてきた学力というのは、将来の考える力、創造する力の基本になりますから、大学入試でも、いろいろな入試をすることはいいと思いますが、教育する側からしますと、小中高の教育は地道なものが大事で、一般入試は重要だろうと思います。

ただ、今考えていかなければいけないのは、全国各地で小中、あるいは中高というように連携して教育していく。

(谷本知事)

一貫教育ね。

(樫見参与)

はい。いじめ問題やいろいろなことについても、断絶することによって子どもたちが新しい環境に放り込まれて、友達もひよっしたらいない。そんな中で、いじめや孤独感であったりというところで、余計なストレスを感じないような形で一貫性が導入されてきた。教育する場合には、これが全て絶対だというのはないと思います。多様性がかなり求められてきたというのは非常に良いことではないかと思っています。

それから、私どもの大学では教員を養成しているのですが、本来は大学の教員養成というのは、例えば国語であったり、社会であったり、教科を教える専門性を教えることですが、それ以外に、実はこれは師範塾の方では先進的におやりになられていることですが、教え方であるとか、それから教員が子どもさんと接する中で、例えば私は法律家ですから、危機管理的なものが必要になってくる。東日本大震災で子どもたちの安全を教員がどう図ってやらなければいけないのか。それから、いじめなど子どもたちの置かれている状況をきちんと発見して、しかるべきチームで教育をする。そうすれば、教員が第1次的な相談窓口なり、受け止める機関となって、そこからいろいろなしかるべき機関へつなげていく要になる。そこを大学としてはきちんと教えていかなければいけない。そういう意味で言うと、教員になる学生、あるいは本職の先生方は非常に学ぶべきものがものすごく過大になっているので、今度は逆に教員の方をある程度守ってあげられるようなことも考えていかなければいけない。

今回、中にはあまり入っていなかったのですが、学校現場というのは個人情報のお宝な

のです。今回の計画には具体的にはあまり入っていなかったと思うのですが、社会の中で情報の管理、それから情報の漏えいの問題に対処していかなければいけないと思っています。

それから最後に、今回の中でクローズアップされてきたのは、発達障害や、その他にもいろいろな障害を持ったお子さんがいるのですが、彼らの特別な支援を要する教育の重要性が掲げられているかと思います。20～30年昔には、発達障害は社会的に認知されていなかった。専門家はきっとご存じだったと思うのですが、発達障害という言葉を与えられて初めて認知されて、そして周りを見回すと意外に多い。この子たちを教育の中から置き去りにしてしまうと、まさに人材養成ができないところが出てくる。そういう点で、ここにもきちんと施策を置いていただいていることが、今回の基本計画の中でよかった点かなと思っています。

(谷本知事)

小中一貫というのは、アメリカで12学年いましたが、美術の時間になると、1年生、2年生を11学年生が教えているという形での授業がありました。要するに、先輩が後輩を教える。小中一貫となると、そういうことができるかもしれませんね。中学校3年生が小学校4年生を教えるとか。国語とか英語などは駄目だけれど、美術、図工、工作などを。だから、12学年という年齢差があると、そういう教育ができるということがありますね。

(樫見参与)

教育だけではなくて、お掃除などのときにも、上級生の人たちがいわば先生のような形で、図書館などみんな教えてくれるわけです。それが教育ではないかと思います。

(谷本知事)

当時興味があったのは、僕が受けた大学は非常に面白い入試の出題の仕方をしていて、世界史、日本史は時代の変遷を縦系列で覚えますが、問題が横系列で出るので。要するに、戦国時代には中国では何が起きていたか、ヨーロッパでは何があって、それが相互にどのように影響し合っていたかという問題で、世界史を横軸に見ると非常に面白い出題の仕方だった。あれをやると新たな発見ができて面白いのです。縦だと大体丸暗記するけれど、横というのは、日本の江戸時代には中国ではこんなことが起きていたとか、ヨーロッパでは既にこういう動きがあって、それがこういう形でこちらに影響を与えているのだとか、入試問題としては非常に面白い出題の仕方でした。ああいうのは世界史の勉強では教えてくれなくて、特別に勉強しなければいけない。

(金田教育委員長)

結局、今知事が言われたような、若いときに世界史、あるいは国際関係的な捉え方をされていることが、現在、リベラルアーツとして、いろいろなものに遭遇しても、理解される、対応できるので、大事だと思います。残念ながら、今の文科省の大学入試の在り方、大学での教育は、そういうものを非常に細分化してしまうのです。世界史の未履修のときに、知事に「問われるべきは大学の入試制度であり、大学だ」と言っていたのです。

そうすると現場の先生が、悪いことをしたのだけれども、うちの知事はこういうことを言ってくれたということで非常に熱くなった。石川県にも未履修があったわけですが、次に頑張ろうという思いをさせていただいた。一番先に言ったように、現場が熱くならないといけないのですが、問われるべきは大学だと、あるいは、入試問題の在り方だと言っていたことで、われわれは非常に、「よし」という思いになりましたね。

(谷本知事)

聞きたいことはありますか。

(松澤参与)

基本計画に携わったという意味で、ご意見を申し上げるのはまずいかもかもしれませんが。第1期から来ていて、僕は県立高校の「学力スタンダード」の学力の質の確保にすごく興味を持っていて、これは1期から引き続いていた話なので、そこら辺の成果がどうなっているかというのを聞きたいし、ぜひこれをさらに追及してもらいたい。そういう意味では、樫見先生がおっしゃったように、基礎学力は非常に重要なのです。ただ、1点、2点で争うのではなくて、ある一定レベルを超えればいいのではないか。その辺が重要な観点だと思うので、そこを確保していくことが非常に重要な視点だと思います。

今回入ったのは、イノベーション人材、先ほどのグローバルも含めてですが、これはある意味ではリベラルアーツが非常に重要なのです。イノベーションだと専門教育だけやればいいという話になってはいけないので、むしろ、その人が持っているトータルの力でイノベーションが起こる、そこをもう一度考え直さなければいけないと私は考えています。今、多くの大学が改革しまして、今まで細分化されていた学科構成が非常に大きくまとまりましょうと。工学系でしたら、いわゆる機械・電気、あるいは土木・建築などかなり細分化されたものがまとまっていきましょうという話です。そういう意味で、なるべく境界領域を含めた大学教育にしようという変化をさせています。

もう一つは、よくいわれるように、国際基督教大学あるいは秋田の国際教養大学も、ある意味リベラルアーツの教育をしているわけです。あまり専門性を問わない。だけど、産業界でも非常に貴重な人材として受け入れられ、秋田の国際教養大学は競争率を非常に高くして教育も見直されている。そういう意味で、リベラルアーツ教育が非常に見直されていますし、専門家の中でもそういう教育をしようということになっています。その典型的なものが、大学院教育でも最終的には人間力だということで、われわれの大学でも必修科目のような形で人間力を。これはアクティブ・ラーニングやいろいろな方法を使いながらトータルで人間力を教育する。もちろん小中高から大学まで、全て最終的な教育目標は人間力を高めるということです。知識、対応力、あるいは自分で制御できるなど、そういうようなものを人間力を教育することで。これはまさしく大学教育でやらざるを得ない、あるいは、やった方がいいという話になっていますので、そういう意味で、最終的には小中高は人間力を向上させるということが大変重要ではないかと。そこら辺を、いろいろな部門でターゲットが分かれてやっていく。

(谷本知事)

大学の入試改革で一貫して改革をしなかったから、ゆとり教育とかと言って小中学校の授業時間数を減らしてしまったでしょう。そのしわ寄せがみんな高校へ行った。ところが大学入試は全然変わらない、授業時間数を減らす前の前提で大学入試がつくられているから、高校はそのしわ寄せを受けて、世界史の未履修という選択をせざるを得なかった。だから、本当は一貫した大学の入試改革をしないとイケないのに、ゆとり教育で小中学校の授業時間数をどんどん減らしてしまって、高校がそれを全部受けてやらなければいけない。ところが大学入試は全然変わっていないから、大学入試勉強をしなければいけないということで、校長がみんな、大学入試科目でない世界史はやらなくていいと。だから、ゆとり教育と大学入試がものすごくアンバランスになってしまって、高校はその狭間にはまってしまって、みんなが苦労したのですよね。

(松澤参与)

大学院の先生が入っているから、基礎学力が落ちていると批判するのですが、お互いに批判していても仕方がない。

(丸山参与)

私も前の教育会議のときに少し関係させてもらったのですが、そのときに話が出ましたのは、学校での教育だけでなく、家庭教育と地域の教育力の話がかなり強く出たと思います。ここにも基本目標6にそのことが書いてありますが、先ほど知事もおっしゃったように、学校だけに任せないで、家庭と地域が責任を持ってやれるような仕組みをつくらどうかと。私の知っている先生で、人間の基本的な性格は遺伝か環境かということを一生涯懸命考えた人がいたのです。みんな遺伝だと思っているのです。「あそこは頭のいい家柄だ」とか。ところが9割は環境だそうです。遺伝だと思っていることも、後からみんな獲得しているのだそうです。だから、家庭でものを考えるような仕向け方が大切ですよ。これは何だとか、これはどういう理由かとか、幼稚園児でもできるわけです。脳の大きさは1歳までに大人の半分になるそうですから、1歳までに何をやるかが、かなり重要だと僕は思うのです。そういう意味で、狭い意味の教育論ではなくて、人間性も含めて、良い意味の家庭の教育論、地域の教育論をどんどん県全体でやっていただくと大変ありがたい。学校だけにお任せしないで家庭と地域がもっと協力する態勢はどうでしょう。

(八重沢参与)

では、すごく簡単に3点。

まず1点目は、非常にタイムリーといいますか、これを見ると新しい時代が来たのだなという感じがしています。私もこれに少しだけ関わらせていただいたのですが、知事はとてもよくご存じですが、京都大学の松本元総長が、新しい京大の学生たちの能力について、「異自言(いじげん)」とおっしゃったのです。「異」は、異文化を理解する。「自」は、自分を理解する。「言」は、言語をやる。基本的に、今、どこの大学でもSGU、グローバルスタンダードの対応、世界に打って出る大学に文科省がお金を付けていますが、そこでは基本的には「異自言」ということをどこの大学でもうたっています。少し前までは多文化共生という言葉がはやっていたのですが、多文化共生はグローバルにその席を譲っている

のです。言葉があまり変わるのはいくつかではないかという意見もあるかもしれませんが、それだけその部分にセンシティブティの高さが向いているのだと考えれば、やはり言葉は生き物ですから、そのような目標値があった方がいい。私たちも教育振興基本計画と同じように、大学でもそうした三つのこと、自分を知る、世界を知る、その間の媒介する言語を獲得するというようなことが非常に大きな目標です。しかも、世界のグローバルスタンダードに合うように、今度の1年生からクォーター制にしています。だから、今までの16単位を7.5単位に分けて、4学期に分けて教育します。

(谷本知事)

4学期に分けて、4学期ごとに全部試験をやるわけ？

(八重澤参与)

そうです。それがどのように出るかですが、今日は学生たち、ひよこちゃんたちの……。新入生はすぐ分かるのです。紙袋を持って、そのあたりをふらふらしています。今度来る1年生は光っているのです。すごく輝いていて、希望を持っていたら輝きを出すのですかね。

(谷本知事)

それは大学に入ったばかりだから。

4回ということは、3カ月に1回試験があるわけ？

(八重澤参与)

そういうことですね。

(谷本知事)

それは高校や中学よりもすごいね。

(八重澤参与)

そのようにしてグローバルな人材を育てるという一つの考え方でやるのです。

(谷本知事)

それは金沢大学全学部を挙げて、そういうことをやるわけ？

(八重澤参与)

もちろん。全学部というか、今度の1年生だけです。

(樫見参与)

基本的には学士課程の4年生は全部やります。4学期に分けるのですが、基本は4学期にすると、一つの科目が1単位ずつになるわけで、7.5回やる。それはなぜ四つに分けるかというと、今までは前期か後期かどちらかをきちんと取らないと単位がもらえなかったの



ですが、1 単位ずつに短期にしますと、その間に例えば夏休みを挟んで 6、7、8、9 とか、あるいは、いろいろな形で留学や語学研修がすごくしやすくなるのです。

(谷本知事)

いいけれど、大学の講義自体が前期・後期だったのは、全期一貫してやらないと、その講座をやったことにならないということがあるからやっていたのでしょうか？ それをまた細分化してしまうわけ？ 3カ月で成果が出るような科目をやるわけ？

(八重澤参与)

ただ、全てこれからのことですから、多分、問題は出るし、学生が履修の仕方を間違えると、他の大学では単位が取れなくなる。

(谷本知事)

逆に教える側は、前期・後期で半年単位で授業をやっていたけれど、それを3カ月単位に圧縮しなければいけないのですね。

(樫見参与)

いえ、圧縮はしません。

(谷本知事)

半分に分けたら、半年間学んで成果が出てくるのに、半分に切ってしまったら、学ぶ方からすれば。

(八重澤参与)

そうなるかもしれないし。

(松澤参与)

うちは4学期制を設立当初からやっているのです。

(谷本知事)

それは3カ月単位で？

(松澤参与)

基本的に2カ月単位です。いわゆる7週半、8週間ですから、2カ月です。

(谷本知事)

それは先生のところはスタート時からそうやっているから問題ないのか。

(松澤参与)

われわれのところは基本的には2単位なので、2単位制を全部取っていますので、週に2

回やるから、3週で。

(谷本知事)

金沢大学もそのように変えていかなければいけないわけだ。前期・後期からガラッと。

(松澤参与)

だから、うちの方は短期集中型なのです。

(谷本知事)

金沢大学も1年生から短期集中型になるわけだ。2年生以上は従来の前期・後期型でやるの？

(八重澤参与)

まだ今までの。

(谷本知事)

短期集中型になるのか。

(松澤参与)

私たちはずっとそれでやっていて。

(谷本知事)

金沢大学もそうなるわけか。

(樫見参与)

今、完全にクォーターでやろうというのは、先ほどおっしゃったリベラルアーツでは、教養教育のところを特に重点的に4学期制にしました。専門になりますとちょっと事情が違うので、そこは前期・後期というふうに流動的に、あとは改善を重ねていかなければいけませんので。

(谷本知事)

だけどこの前、トビタテ！留学 JAPAN.ということで、県内企業に就職することを前提にして海外留学する生徒が10人ぐらい来たけれど、3年生、4年生がいた。それで1年海外に留学するとか、私は半年だとか、私は3カ月だとかとっていました。あれはみんな県内企業に就職が前提だからね。

(樫見参与)

1年間休学したり、半年休学して、今は9月卒業もできますので。それは学生には気の毒なところがあるので、それを少し改善したいというのもあります。

(谷本知事)

ちょっと難しいね。システムを変えるときには必ず軋轢が出てくるから、それをどう摩擦を少なくして、ソフトランディングしていくか。

(八重澤参与)

ですから、今は日本人の学生側のことで盛り上がったのですが、海外から来る人は短期間で留学したりするのは来やすいわけです。ですから、それは相互交流のことも頭にあるということです。

では、あとの二つはとても簡単に。大学のことだけだとちょっと物足りないので、これからは全部高校のことなのですが、実は先ほどから、教育委員長も、橋正委員も、ともかく子どもの心のことで、困っている人には手を差し伸べたいということで、今度は「チーム学校」という形で対応すると。この「チーム学校」という考え方について、私は心理学ですので、「チーム学校」というのは、それぞれの専門性を生かして、 $1+1=2$ ではなくて、 $1+1=3$ 以上。ここには問題が起こってからのような書き方をしていますが、起こる前に、事前に地域の人からも知恵を借りたり、情報を寄せていただいたりしながら、問題になる前にこれをカットしてしまう。問題にはしないというようなやり方が、とても大事だと思っています。

最後三つ目、これはお願いなのですが、今のことにも関係するかもしれませんが、地域、学校の教員になる人たちには、実は短期、長期の留学経験のある先生もたくさんいます。そういう方をデータベースとして、子どもの多文化、グローバルの理解に活用していただくことを望みたいと思っていますので、よろしくお願ひいたします。

(谷本知事)

話のがらっと変わりますが、今度選挙権が18歳まで下がるでしょう。あれは文科省から通知は来ているのか。具体的にこうやれというものが出ているのか。

(木下教育長)

手引きも来ていましたよ。こういう教材を使ってやりなさいと。

(谷本知事)

高校生も政治活動をやってもいいことになっているのですか。

(木下教育長)

それは文書で来てまして。

(谷本知事)

デモに参加してもいいということになっているの？

(木下教育長)

はい。健全なデモですよ。

(谷本知事)

健全かどうかというのは教育委員会が判断するのか。

(木下教育長)

それは難しいですが、暴力的なもの、反社会的なものは駄目ですが、健全な形で政治の表現をするということについては。

(谷本知事)

学校教育の中で、教育の項目として取り上げることはあるの？ そういう時間をつくるわけ？

(平島教育次長)

はい。倫理社会や政治経済という地歴・公民科という科の一端でそういうことも取り入れていくという。

(谷本知事)

それは具体的に文科省から要領が来ているわけですか。それに従ってやればよいということですか。

(木下教育委員)

そうです。冊子も来ていますから。

(谷本知事)

大学はどうするのですか。高校でそういう教育をするから、大学ではあえてやらないと。19歳とか、学部にはいますが、そんなのは大学はもう関係ないと。高校で主権者教育をやってくるのだから、大学では主権者教育はやらないと。大学へ入ってきたら、当然、もうそういう意識は持っているものだ。持たない人がおかしいという。

(樫見参与)

そこまでは。その辺は指導は考えています。今のお子さんは年齢の割に少し幼いですから、入学時のオリエンテーションで大学社会生活論などいろいろな教育をしていますので。

(谷本知事)

そこは別に文科省から各大学には。それは大学の自主判断にお任せするということですか。だから、主権者教育をあえてやらなくてもいいし、やってもいいですよと、それは任せるということですか。金沢大学はどうされるのか。

(八重澤参与)

今のところは。

(樫見参与)

やはり 18 という年齢、高校を卒業して社会人・・・。

(谷本知事)

高校でしっかりやらしてもらえばいいと。

(八重澤参与)

いやいや、そんなに。

(樫見参与)

むしろそれを考えるのが大学だろうと。

(八重澤参与)

あとは、情報の集め方を教える。その情報の内容についてよりも、このようなことをチェックするというのを。

(谷本知事)

そういうのは大学の授業であるの？

(樫見参与)

情報の集め方については、情報処理ですとか、基本的なツールは教えます。

(谷本知事)

いずれにしても、その部分は大学の自主性に任されているということですね。

(八重澤参与)

そうです。

(黒野総務部長)

それでは、皆さまからご意見を頂きまして、ありがとうございました。冒頭申し上げましたが、第1回会議でご了承いただきましたとおり、今回改定いたしました「第2期石川の教育振興基本計画」を本県における「大綱」として位置付けさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

\*\*\*異議なしの声あり\*\*\*

(黒野総務部長)

それでは、そのようにさせていただきます。

(谷本知事)

あとは先生、教職大学院としっかり連携を取りたいと思います。

(樫見参与)

はい。ありがとうございます。

## 5 閉会

(司会)

それでは、これをもちまして、第2回石川県総合教育会議を閉会したいと思います。  
本日は、どうもありがとうございました。